

のだ。日本國の宗教は法華經に統一さるべきであること
日本國の姿、即ち法華經の姿であるからである。これを
知るには法華經による開眼をすれば本尊統一され、國体

の如何に尊嚴さかが解るのであらうと思ふが暑熱わが貧
寺の居室にもせまる腦裡雜然たり。更に思索の秋に項を
改めて整理して大方諸賢の指導を仰ぐ事にする。

外道の書

——讀書餘談——

塚本龍晟

世は、世界史的局面に追込まれ、何處の國と雖も自國
の將來に就て無關心で居られなくなつた。總動員法の全
面的發動下にある我國の國民のうちで、燈下に新しい書
物の匂ひを嗅ぎ、月の光、虫の音を、見聞きすることの
出来る少數のわれ／＼は眞に撰ばれたるものと誇り得る
であらう。よし又撰ばれたるものでないにしても、かゝ
る時間を持ち得る我が國のゆとりを感謝せずには居ら
ない。

近頃、總動員体制下で紙の節約が強制され、雜誌、新
聞等定期刊行物は紙質を悪くするとか、減頁するとか努
力してゐるかの如く見えるのに、書籍に至つては、その
出版の統計は恐るべし、一時間に一冊半の割合で生産さ
れてゐるさうである。全く驚異に價する現象である。而
もこのとてつもない新刊書が讀まれてゐるのであるから
頼もしいといふより恐ろしい氣がする。前に述べた私の
言葉などこゝに於ては全く素朴な感傷にしか思はれない

であらう。いふまでもなく、戦争は舊い文化を破壊して新しい文化の成立を意味する一面を持つてゐる。戦時のかうした文化的な現象は、過渡的な跋行性を伴ひ乍ら新文化の單一性に合流するものと見られる。といふ理論も考へ得られるがこの頻だしい書籍のうちでどれだけの本がこの役目を果し得るかが問題である。読書界、出版界に於てもグレンシャムの法則が通用して、悪書が良書を駆逐しなければよいがと憂へざるを得ない。銀座のキャンディストアで色とりどりのお菓子を並べるやうに、書籍でも色彩的な書物の装訂や、誇大な廣告を賣らんかな主義の下に競つてゐる現状ではあるまいか。悪書の横行は健全な思想を毒する。かゝる意味に於て、読書人の戰時的役割は、書籍のゲ・ベ・ウでなければならぬ。なくもがなの書物や、悪書の識別が要求されるわけである。さすればこそ読書人は読書人として大衆から區別されたプライドが持たれるわけである。モンテーニュは三つの交りといふ文章の中で、高雅な紳士と交り、美しき

淑女と交り、良き著者との交りを上げてゐるが、とりわけよき著者との交りは「三世紀に一遍もあればよい方だ」と書いてゐる。良書も又この言葉通り三世紀に一遍といふ割合の出現であらう。誠に値ひ難き良書ではある。われわれの間でも、一生手離なさず、常に愛讀して止まないといふ書物を持つてゐる人はごく稀であらう。一度買つて、一度讀んで賣り拂つてしまつた書物の何と多いことか、生涯、感銘を忘れず、何時も新しい態度を以て讀まれる良書は、モンテーニュのいふ如く三世紀に一度めぐり會へればよい方だといふ言葉は事實である。

私は最近、昭和八年京都帝國大學で起きた瀧川事件で有名な前同大學法學部教授瀧川幸辰氏の「刑法と社會」を讀んだ。短い評論と隨筆を蒐めた一本であるが、啓發されるどころ頗る多かつた。瀧川氏は我が國でも少數の刑法學者の一人である。最初私は、私の生活上あまり接せぬ世界である法律を多少でも理解したいといふ念願のもとに購つたのであつた。そしてそれは多分固苦しい理

論の展開であらうと豫期してゐたが、読み行くうちに、法律はあくまで人間社會を濫く導いてくれるものであることを知つた。「人權擁護と豫審制度」「豫審」「刑法と社會」「書畫の偽作と刑法」「刑事被告人と肖像權」「經濟統制とその違反」等一聯の文章に於ては、我國現行の刑事裁判の核心を衝き、法律運用のむづかしさを指摘してゐる。その具体的な實證的な記述は門外漢をもよく納得させ、法律の在り方を親切に教へてくれる。又「刑法學界に於ける魚屋式論法」と題する短文では、我が國の學者が新しいものに飛びつきたがる魚屋式な態度をいましめ、批判と反省を促してゐる。これは僅かに二頁程の短文であるが、單に刑法學者のみならず、あらゆる方面に於ていはれることであり、まして青年に於ては良藥たるの意味を失はない。又大學と學生に就ての數篇の評論、生活の斷片たる隨筆等に於ける瀧川氏の態度は、人間味にあふれ、そして知識人としての節度を逸脱せず、近頃感銘深い書物であつた。

私はかうした専門外の書物を机の上に置くたびに宗門上層部の年寄つた人々のことを考へる。私が十七八歳の頃宗乘の本やお經の本を、机の上に置きさえすれば師匠は喜んでゐた。ひとたび雜誌だとか文學の本など並べて置かうものなら、外道を以て目され大目玉を食つたものである。私の法兄などは本立の一番下へ御遺文を置いてその上に有島武郎全集をのせたかをもつて宗祖を無視したことになり、その御遺文は師匠に取上げられ、有島全集外道の書物は、悉く庭にほうり出されたといふ記録を持つてゐる。私の師匠は非常に人間味に富んだ人であつたが事宗祖及び宗門に於ける限りかうした極端な愛を持つてゐた。私の師匠のみならず、現在七十を過ぎた宗門要路の人を師匠と仰ぐものは多かれ少なかれ、この學問鎖國令に逢つてゐることであらうと思ふ。われ／＼より一代前の時代は、漸くにして封建の諸制度を脱したばかりであつたし、まして傳統と因習の強い寺院の師弟教育がおよそどんなものであつたか想像に難くない。今

口若しもわれ／＼から所謂「外道の書」を奪つたら、その結果はどうであらうか、社會の成員として、その生存競争に堪え得ないばかりでなく、正しい傳道も布教もおそらく考へられないだらう。「外道の書」といふ言葉はもはや往時の宗門氣質の一エピソードに過ぎない。久遠不變の眞理は、先師の垂訓に待つべく、現代的な智性と教養とは、すぐれた「外道の書」より受け取るべきである。

學校に在るうちは、學校の専門の教科書だけ讀んで居れば差支へないやうに先生もいへば學生もさう思ふ。外の書物は學校が終えてから讀めば充分だ。と聞きもし、思つても來たが、學校を離れてしまふと、貯金と同じやうによほど心掛けなければ讀書は出来るものでないと、私はつくづく考へてゐる。しかも私の場合は學院も三年半ばで退ぞかねばならなかつたので、随分讀書には、心がけて來たつもりであるが、一人勉強はなまなかな辛さではない。五年も八年も學校に居られるものは専門の學科を忘れないやうにして、内外の書物を讀むべきだ。瀧

川氏もあまり學生が専門の學科ばかりやることは人間として大を爲す所以でないと次の如くいつてゐる。「必要な知識のみを吸収してゐるものは小廻こまわはきくが、表面的に墮する。これに反し視野の廣いものは同時に一つ奥にゆくだけの深さがある。例へば醫學生が哲學を、法學生が美術史を聞くことは深みのある人物を作る上に缺くべからざることである」。傳教大師が叡山に道場を確立した時の願文の中に「遍く六道に入り佛國土を淨め衆生を成就し盡未來際恒に佛事を爲さん」といはれたが、當家だけの學問で六道が歩るものではない。瀧川氏は學生が出来ただけ多く、むだ讀みをすることを希望してゐるが、私も或る意味で同感である。私のぐるりの幾十人かの宗門人を見ても、どちらかといふとあまりにも世間のことを知らなすぎる。法律は勿論、思想、文學、音樂、政治、經濟、等々殆んど無關心といつても過言ではない。よくまあこれで何の不自由もなく暮らせると驚ろかざるを得ない。一面これは社會が寺院に何も要求してゐない

一證差でもあらう。言葉を換へていへば、坊さんなど社會ではどうでもよいと思つてゐる、とも見られる。何かと、對手にされたり、したりするやうになるのは、今日

おもひつくまゝ

— 宣撫通信 —

私が昨年三月内地を出て上海に上陸して、馴れない支那の然も法衣を脱しての陣中生活に戸惑ひしてゐたのが今では特務班としては古顔になり、所謂宣撫班長を津浦線の滄縣で半ヶ年、此の廬州へ來てから三ヶ月も勤める様になつたのだから短い間の變化に今昔の感に絶へないで居るのも無理からぬことである。

實に我々の従事して居る仕事は難しい、支那語も日常不自由はしないでゐるけれど、いざ大會をしたり縣公署とか、警察署で訓辭をしたり講演をする時には通譯なし

學校に在るものが廣い教養と深い智識を得る覺悟がなされなければならぬだらう。即ち「外道の書」を多く讀むことである。

小 崎 龍 雄

では出來ないし、御存じの通り凡てが慢々な連中だから、こちらで云ふ事業の三分の一もしないし、次から次へと事態は變つて來るし、會議等で南京とか蚌埠とかに十日近く出張をして歸任して見ると支那側の機關は殆んど停止して居る状態だし、匪團、遊撃隊は横行する、情報確實にせねばならぬ等まだ筆に出來ぬ事がいくらかもある。然し一方我々の造つた大民會其他多くの民間團體は相當に活躍して呉れて居る。殊に最近汪精衛の和平聲明が租界にまで影響して居る爲か一般民衆が和平